

◇拠点形成概要

機 関 名	早稲田大学
拠点のプログラム名称	アジア地域統合のための世界的人材育成拠点
中核となる専攻等名	アジア太平洋研究科国際関係学専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 天児 慧 教授 外 17 名
<p>[拠点形成の目的]</p> <p>(1) 目的：アジアの地域統合を総合的に研究し、学問的・社会的フィードバックができる人材を育成する。アジア統合はデファクトとして進行し、域内での経済活動や文化交流も目覚ましく発展している。また、環境問題や大規模な自然災害といった問題をめぐる協力も深まりつつある。一方、アジア地域には、政治体制や経済発展の差異や、宗教・生活様式の多様性、さらには歴史に根差す相互不信など、協力して問題の解決にあたるうえでの阻害要因も多く、制度としてのアジア統合は著しく遅れている。そこで本プログラム（以下GIARIと略記）では、国益を超えた「<u>地域益</u>」の実現に貢献できる包括的で高度な専門性を有した人材を育成し、アジア地域に噴出している諸問題を解決しつつアジア統合を推進する世界的な拠点形成を目指す。</p> <p>(2) 必要性：日本をはじめ、アジア各国では地域統合や共同体構想が盛んであるが、その理論的研究を人材育成と一体のプログラムとして展開する拠点は存在しない。この分野においては研究と教育の有機的連携が実現しておらず、人材育成面でも統合理論面でも顕著な成果は見られないのが現状である。GIARIでは、政治学・経済学・社会学の方法論的基礎に立脚しつつ、領域間の重層性・複合性を配慮した新しい統合研究のアプローチ（GIARIモデル）を開発し、その理論的成果を新しい教育カリキュラム（GIARIメソッド）として展開する。GIARIモデルは、領域とアプローチのキー・コンセプトの組み合わせ、すなわち、①政治統合とアイデンティティ、②経済統合とサステナビリティ、③社会統合とネットワークに基づき展開される。またその成果は、領域とキー・コンセプトの「<u>3×3のマトリックス</u>」に体系化され、GIARIメソッドとして人材育成カリキュラムへフィードバックされる。重層性・複合性に焦点を当てた人材育成と理論研究は他に例を見ないユニークなもので、アジア地域統合の未来を切り拓くための礎となる。</p> <p>(3) 重要性：GIARIの中核拠点であるアジア太平洋研究科（以下GSAPSと略記することがある）は、アジア太平洋地域の様々な問題を専門的に扱う世界最大規模の独立大学院である。H20年度現在修士課程学生323名、博士後期課程学生169名が在籍し、その約65%がアジアを中心とする留学生である。英語と日本語による二言語の教育システムを創設当初から採用しており、国際的な人材と英語による学際的なアジア研究の基盤があることは専門的な人材育成にとって最大の強みである。また本拠点は21世紀COEプログラム「現代アジア学の創生」の一環として、H16年からアジアの地域協力・統合の拠点形成に取り組んでおり、アジアの主要大学との連携ネットワークの形成も進んでいる。今後アジアの域内協力・地域統合の進展のためには、人材育成の国際共同化が必須であるが、本拠点は世界的に見ても、<u>アジア統合人材育成のハブ</u>となりうる高いポテンシャルを有している。</p>	
<p>[拠点形成計画及び進捗状況の概要]</p> <p>(1) 拠点形成：初年度は、アジア経済研究所や国際協力機構など、学外関連機関から関係者を招待したキックオフミーティングに続き、H20年1月には、スリン・ピッツワンASEAN事務局長を招聘し、国際シンポジウムを開催するとともに、ASEAN事務局との人材育成強化で相互協力を進める合意に達した。北京大学、高麗大学、タマサート大学など、アジアの主要大学の関係大学院と箇所間協定(MOU)を結び、復旦大学、シンガポール国立大学とも合同ワークショップ実施を通じ、関係を強化した。また、北京大学、ソウル大学とのサマー・スクール（修士学生対象）を定例化した。H21年度からは、ブラッセル自由大学を中心としたEUのエラスムス・ムンドゥス博士課程プログラムへの参加要請があるなど、アジア地域統合のための人材育成の世界的拠点として、その実質を着実に備えつつある。</p> <p>(2) 研究・教育体制：まずH19年度には、アジア6カ国12大学において、地域統合についての大規模なアンケート調査を実施し、基礎データの収集・構築につとめた。さらにプログラムの開始に合わせ、博士課程の事業推進担当者全員が自らの研究構想を提起して互いに議論する場として「<u>アジア統合研究セミナー</u>」（毎週金曜日午後）を開設し、当プログラムに関心を寄せる博士課程の学生とともに、GIARIモデル、GIARIメソッドの構築を進めた。H20年度からは、当該セミナーを、「<u>アジア統合セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ</u>」として授業科目化した。またH20年8月後半には、アジアの地域統合に関する世界的に著名な学者を招聘し、国内外からの優秀な博士課程学生20数名が参加する第一回目のサマー・インスティテュートを実施した（恒久化の予定）。</p> <p>(3) 人材育成：H19年度より<u>アジア特別フェロー(RA)</u>、<u>アジア一般フェロー</u>（博士後期課程学生研究支援スキーム）を制度化し、若手研究者の支援を進めた。6月より赤羽恒雄教授(モントレール大学)を客員教授として迎え、フェローの学生を対象に英語による論文執筆の集中指導、国際的な学会への参加・発表、国際的学術誌への論文投稿などを支援する仕組みを作った。また、かつての博士課程学生が組織した院生フォーラムを発展させ、博士課程学生、ポスドク学生による研究会・ネットワーク組織(Waseda University Doctoral Student Network/早稲田大学博士課程学生ネットワーク、以下WUDSNと略記)を立ち上げた。彼らのワークショップ、研究大会の企画・開催を積極的に支援した。また、主にフェローからの優秀な論文をまとめた雑誌<i>Asian Regional Integration Review</i>を発刊した（H21年4月第1号発行）。</p>	

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、本プログラムが大学の将来構想に有機的に組み込まれており、評価できるが、今後の発展を考慮した場合、組織的な支援という観点から、とりわけ本プログラムの中核を担うアジア太平洋研究科からの全面的な支援が必要である。

拠点形成全体については、最近締結に至ったとされるASEAN事務局との協定等を活用し、具体的な成果を伴う国際的なネットワークの拡充発展が大いに期待される。

人材育成面については、活発な教育実績があり、その具体的な成果が期待されるが、今後は、方法論的な面での強化を図り、独自のGIARIメソッドを分野横断的な学習のための方法論として確立することが期待される。

研究活動面については、学問領域としてのアジア地域統合学の在り方、その推進方策等に関して、個々の事業推進担当者が独自に取組み、また、事業推進担当者間で真摯な意見交換がなされているが、今後は、アジア地域統合の具現化に先立ち、課題ごとに歴史の実態について実証的な研究を蓄積していくことが期待される。

今後の展望については、若手研究者の個別的関心を既に設定された諸課題と整合させ、統合することによって、拠点形成の実質的成果が蓄積されるものと期待される。